【研究ノート】

東日本大震災に遭遇した
ある特別養護老人ホーム職員のモノグラフ

岡　本　多喜子

はじめに

この研究ノートは，2011年３月11日の地震およびその後の津波被害に遭遇した旧来型の特別養護老人ホームの職員たちの行動記録である。この記録の対象者は，岩手県上閉伊郡大槌町吉里吉里にある特別養護老人ホーム三陸園（社会福祉法人堤福祉会）の職員たちである。

大槌町は明治学院大学とボランティア連携協定を締結している。明治学院大学の学生ボランティアは，ボランティアセンターを通じて，現在も定期的に大槌町での活動を継続している。

2012年春に，堤福祉会が法人として個々の職員がどのような動きをしたかの記録を作成したいとの依頼が，堤福祉会の総合施設長から非公式にボランティアセンターにもたらされた。堤福祉会は保育園（堤乳幼児保育園）と高齢者施設を２カ所（従来型の特別養護老人ホーム三陸園・在宅複合型施設ゆーらっぷとユニット型特別養護老人ホームらふたぁヒルズ）で運営していたことで，高齢者福祉を研究の中心としている岡本に話がきた。

その後，2012年８月30日(木)から９月２日(日)の４日間にわたり，当時の社会福祉学科の学生５名と岡本とで，堤福祉会が選んだ職員からの聞き取りを行った。聞き取りは，保育園，特別養護老人ホーム三陸園・在宅複合施設ゆー

らっぷ，特別養護老人ホームらふたぁヒルズ別にまとめた。今回は，特別養護老人ホーム三陸園・在宅複合施設ゆーらっぷの分を掲載する。

2013年10月から堤福祉会の総合施設長は，岡本が作成した記録に目を通し，修正を行った。その後，この記録を研究の一環として公開することの承諾をしていただいた。

今回，この記録を公表するにあたり個別職員の名称はすべて仮名としている。

この記録を作成するにあたり，明治学院大学ボランティアセンター長・原田勝広先生，元副センター長・齋藤百合子先生，コーディネーター・市川亨子さんには大変お世話になった。ここに感謝を申し上げる。

このインタビューを担当した学生は，2012年当時・明治学院社会学部社会福祉学科４年，小林さつき，小松千尋，高林希彩，同３年，杉山奏，古屋誠の５名と岡本である。私たちは２～３名が一組となり，半構造的インタビューを行なった。堤福祉会はインタビュー内容をテープに録音している。しかし今回掲載するこのインタビュー内容は，ノートに記録したものをまとめたものである。

彼らは精力的に聞き取りを行い，記録をした。彼らの力がなければ，このモノグラフは成立しない。インタビューに携わった学生たちには特に感謝をしたい。しかしそれらのモノグラフをこのようにまとめた責任は，すべてかれらの指導教員である岡本にある。このモノグラフに関する全責任も，当然岡本にある。

1　堤福祉会について

岩手県の資料によると，社会福祉法人堤福祉会は1975（昭和50）年７月29日に社会福祉法人（厚生省社第738号）を設立している[(1)]。そして1976（昭和51）年４月１日に「堤乳幼児保育園」を開設した。その後，1981（昭和56）年

４月１日に特別養護老人ホーム三陸園を開設，三陸園の敷地内にショートステイを1992（平成４）年１月に，デイサービスセンターを2000（平成12）年４月２日に開始し，在宅複合型施設「ゆーらっぷ」とした。「ゆーらっぷ」では，訪問介護事業所と在宅介護支援センターも実施している。2005（平成17）年10月１日にユニット型の特別養護老人ホームらふたぁヒルズと空床型の短期入所生活介護を開設した。

保育園は理事長の自宅の隣にあり，吉里吉里２丁目の高台にある。三陸園は吉里吉里地区の中心地から少し離れた丘の中腹に位置している。らふたぁヒルズは吉里吉里中学校の上にある。堤福祉会の施設はどれも高台にあったために，2011年３月11日の津波による被害は受けずにすんでいる。しかしそのために，多くの一般避難者が施設に避難してきた。特にらふたぁヒルズの場所は丘を越えた反対側が，火災が発生していた赤浜地区のため，丘を越え200名を超える多くの避難者が来た。その避難者の一部は三陸園にも来ていた。また避難所である吉里吉里小学校の隣に保育園があるため，保育園は避難所へ向かう人の通り道ともなった。

次に当日の各施設の利用者状況及び職員の状況を示しておく。この数字は総合施設長作成の「堤福祉会の状況　23.3.11当日　23.2.28現在」と聞き取りによる。

利用者の状況

（名）

事業所（定員）	3.11利用者数	2.28現在数	利用者とその家族の状況
堤保育園（60）	75	75	死亡２　不明４
三陸園（50）	50	49	死亡４
デイサービス（30）	23	登録103	死亡４
短期入所（26）	16	41	
訪問介護（30）		22	死亡６
ケアマネ件数		101	死亡23
らふたぁヒルズ（60）	59	59	死亡３　不明９

職員の状況

（名）

事業所名	職員数	（死亡）	＜不明＞	職員家族の状況	死亡	＜不明＞
堤保育園	20				2	＜5＞
三陸園・ゆーらっぷ	77	（1）	＜1＞		8	＜2＞
らふたぁヒルズ	54	（1）	＜2＞		4	＜7＞
堤福祉会合計	151	（2）	＜3＞		14	＜14＞

その後，職員の中には吉里吉里を離れ，内陸などに避難・転居したものがいたため，人手の確保に苦労することとなる。

2　三陸園の外にいた職員

特別養護老人ホーム三陸園・在宅複合型施設ゆーらっぷは併設しており，吉里吉里漁港にほど近い丘の上にあることで津波による被害はなかったものの，丘を越えると反対側は被害の大きかった赤浜地区になる。そのため，らふたぁヒルズよりは少なかったが，三陸園にも赤浜地区の津波と火災による避難者の一部が，丘を越えて逃れてきた。３月11日午後には，高齢者施設のケアマネジャーの研修会が釜石市で予定されていた。釜石市の市民文化会館内で行われていたケアマネジャー研修会（以下，ケアマネ研修会とする）に三陸園，ゆーらっぷ，らふたぁヒルズの職員も出席していた。さらに浪板観光ホテルで行われた観劇に参加していた利用者，職員もいた。ここでは，ケアマネ研修会に参加していた職員の行動，観劇に行っていた職員の行動を述べた後に，三陸園・ゆーらっぷの状況を確認していく。

（1）　ケアマネ研修会参加者

ケアマネ研修会に参加していた三陸園の久山相談員は，当日の行動を以下の

ように述べている。

「ケアマネ研修会で釜石市にいた。地震が来て，とりあえず施設に戻ろうと思い，車で吉里吉里に向かった。消防団の人に津波が来ると言われ，進路変更したが車が渋滞していたので一緒にケアマネ研修に参加していた看護師さんと徒歩で吉里吉里町内に向かった。途中ご老人がいて，おぶって高台へ避難ということを５回くらい繰り返した。避難所である吉里吉里小学校に行き，倒壊した診療所から小児科医師の薬を運ぶ手伝いをして，それからは搬送されてくるけが人の手当ての手伝いをしていた。この時は元気な避難者も手伝ってくれた。嫁ぎ先の自宅が無事だったので，毛布を持ってきて避難所にいる人々の暖を取った。近くのお寺にも行って毛布をできるだけ集めた。小学校で施設長に出会ってらふたぁヒルズに向かった。」

同じくケアマネ研修会に参加していたゆーらっぷのヘルパー責任者・高橋は当時，妊娠５か月だった。当時は30名のヘルパー利用者を３名のヘルパーと責任者である高橋との４名で担当していた。「釜石での研修会で，市民文化会館にいた。地震が発生した後は車で吉里吉里に向かい，吉里吉里坂からお寺に入った。避難所の小学校へ行き，保育園に向かった。ヘルパーの一人が安渡で２時から３時半まで入浴介助の予定があった。携帯で連絡を入れたがつながらなかった。とても不安だった。このヘルパーは利用者と一緒にらふたぁヒルズに避難していたことが翌日わかった。当時は妊娠５か月だったので，胎教に悪いのではないかと考え，あまり災害の状況を見ないようにしていた。」

在宅介護支援事業所のケアマネジャーの小田切は，「当日は介護支援研究会のため釜石市の文化会館ホールにいた。講師の方の自己紹介が終わるか終らないか頃に地震が発生した。地震がおさまるのを待ってから，車で事務所に向かったが，この時近道をと思い海側を通った。この時点では車のラジオも聞こえず，周りの方から津波が来ると言われて，津波のことを知ることができた。そこで堤保育園に避難し，車を高台にあげた。居宅支援の事務所が津波に流されるの

を見た。保育園の下はがれきで動けなかった。」という。

小野看護師は「当日は仕事が休みで，法人の研修で釜石市にいた。地震後すぐにほかの職員と車で吉里吉里に向かった。お寺のほうに車をまわし，そこから相談員と車を降り，地域の高齢者が避難するのを補助した。津波で家が流されていくのが見えた。その後吉里吉里小学校に行った。避難してきた方を吉里吉里診療所や学校の保健室からもってきた薬などで手当てをした。波にのまれた人で避難してきた人は寒さを訴えていたので，車の中で温めたりした。避難所である小学校には点滴はないので，骨折した人などは消防団の人に頼んでらふたぁへ搬送してもらった。５～６人いた。その後はらふたぁで処置にあたった。」

当時，らふたぁヒルズでは医師がけが人の治療にあたっていた。その医師は，大槌市民病院の近くで開業を予定していた（予定していた医院は津波に呑まれた）医師で，総合施設長と避難先で遭遇した。総合施設長はその医師に，らふたぁヒルズでの支援を依頼した。３月11日の夕刻には，その医師がらふたぁヒルズで診療にあたっていた。しかし，らふたぁヒルズでは次々に運ばれてくるけが人に人手が足りず，看護師でない職員が亡くなった方々の処置などをしているという状況であった。

相談員の久山は，すでに実父が津波で死亡していたことを知らないまま活動をしていた。久山が実父の死を知ったのは３日後である。

（２） 浪板観光ホテルでの観劇

三陸園のレクリエーションワーカー安村は当時の様子を以下のように話した。

「浪板観光ホテルへ利用者と観劇に行っていた。観劇はホテルの地下の舞台で行われていた。地震発生後に海の様子が変だったので，すぐに逃げた。利用者の人達にも階段を上ってもらい，避難した。車いすの方以外は，利用者１人

に職員１人がついた。どうにか避難したが，その後に利用者に当時のことを聞くと覚えていなかった。利用者にとっても，とっさの行動だったようだ。最初はハイエースに利用者と職員を乗せ，吉里吉里小学校へ避難したが，トイレのこと等を考え，らふたぁへ避難し，そこで１泊した。浪板観光ホテルはその後，津波で大きな被害を受けた。今から考えると怖かった。」

同じく観劇に参加していた栄養士の佐藤は次のように語った。「浪板観光ホテルで利用者７名，職員９名と演劇鑑賞中であった。座布団で利用者の頭を守り揺れがおさまるのを待った。利用者の中には車いす使用者もいた。揺れがおさまってすぐに車に乗り三陸園へ戻ろうとした。しかしカーラジオから津波の情報が得られ，三陸園へ戻るのは不可能だとわかったため，らふたぁヒルズへ避難した。らふたぁヒルズでは，まず利用者を地域交流スペースに誘導した。その後は，一般の避難者の世話を担当した。夜に施設長がお菓子や水を持ってきて，一般の避難者に分配した。実家のある陸前高田が壊滅との情報があり，心配だったが，当日は目の前のことで精一杯だった。」

三陸園から観劇に来ていた職員の行動は，観劇に来ていた他の人々の行動に影響を与えた。秋田県の山間部の老人クラブの方々は，当初の地震が治まったことで安心していたらしい。しかし地元から来ていると思われた高齢者が職員の指示によりホテルから離れていくのを見て，このままホテルに居てはいけないのではないかと思った。そこで，皆でホテルを後にして何のあてもなかったがとにかく高台に向かって歩き始めた。地震の後に津波が来るということを考えたことがなかったようだ。歩いていると吉里吉里４丁目に住む地元の方（元岩手県職員）から声をかけられ，地域の集会所に連れて行ってもらえた。そこで数日を過ごし秋田に帰ることができた。食料はこのとき会った地元の人が運んでくれた[(2)]。

その後，浪板観光ホテルは津波による大きな被害を受け，死者も出たことがわかった。

3　三陸園での状況

三陸園では釜石市でのケアマネ研修会に参加した職員と，浪板観光ホテルでの観劇に利用者と一緒に行った職員とで，施設内の職員数は少なくなっていた。

（1）　3月11日地震発生

通常では事務室に8～9人の職員がいる時間帯であったが，当日は園長と事務職と男性職員の3人がいた。またその時間には，らふたぁヒルズの施設長が三陸園に来ていた。

園長は当時の様子を次のように述べた。「地震が起きてからは無我夢中だった。事務所の職員4名は釜石市市民会館で開催されたケアマネ研修で“死生観”についての和尚さんの講演に行っていた。3時15分頃に釜石の研修に行っていた（看護師の）小野から携帯メールで『釜石を出た』と連絡が入った。浪板に観劇に行っていた利用者と職員が心配だった。夜まで連絡が付かなかったが，乗って行ったハイエースがらふたぁヒルズにあるとの情報が入り，無事に避難したことがわかり，ほっとした。研修会に行った職員とは連絡が取れなかったが，地元の人だから大丈夫だろうと思っていた。」

事務職の野村は当時の行動を次のように述べた。

「地震がきてすぐに三陸園の入り口の自動ドアを開け，避難路を確保し，地震の揺れがおさまるのを待った。揺れがおさまらない中，（らふたぁヒルズの）施設長が車で出かける姿を見た。揺れが治まり施設内のあちこちで非常ベルが鳴っていた。防火戸，非常灯，サーバーなどの音を止めた後，エレベーターに誰かが閉じ込められていないか，など施設内を回った。職員が3～4人ずついたので声をかけながら利用者，職員の安否，施設が破損していないかなどの様子をみた。エレベーターに閉じ込められている人はなく，けが人もなかった。

地震では物が倒れた程度だった。日中だったこともあり，職員が夜間帯よりは多くいたので利用者はケア職員が対応していた。三陸園は大きな被害もなく物も壊れなかった。

地震が起きてすぐに職員が持っている連絡用の携帯電話が繋がらなくなった。外に出ると，海から避難してきた漁師さんや付近で働いていた人達が三陸園の駐車場にいた。避難してきた方の自動車３～４台を三陸園の坂の下あたりに駐車し，三陸園の駐車場から海の様子を見ていた。

施設の利用者は地震がおさまると比較的落ち着いていた。三陸園からは吉里吉里地区を襲った『行く津波』を見た。三陸園から見ていると，吉里吉里地区を海が呑みこむ様子を見続けることになった。」

２階の遅番に入っていた相談員の富久は，非常口を開け，居室に入って窓を開けて避難口を確保した。利用者の中には入浴中の方もおり，急いで浴槽から上げた。食堂で食事をしていた利用者もいた。「まず利用者さん達を食堂に集めようとした。その際，外に行けるような格好の準備をした。状況が分かる利用者もいれば，分からない人もいた。状況が分かる人は自ら布団を被っている等をしており，そうでない人には職員が呼び掛けて布団を被せた。」

当日は２階の26名の利用者のうち１名は浪板観光ホテルに観劇に行っていたので，25名の利用者がいた。富久は，「余震が続いていたので，三陸園が崩れるのではないかと不安があった。しかし壊れた物もけがをした人もいなかった。窓から海を見た。山田方面で火事が見えた。夕方になると利用者の食事が心配になった。電気が使えなかったがラジオで被害の状況が分かった。大きな津波が来ることを考え，１階の利用者は２階に移動してもらった。他の２名の指導員は釜石で開かれていた研修会に行っていたので，相談員としての業務を一人で行わなければならなかった。まず１階と２階の職員配置の手配をした。利用者を集会室に集め，厚着をしてもらって布団に入ってもらうようにした。利用者の食事をどうしようと考えた。夜には雪が降りはじめた。大船渡にいる息子

のことが気になった。」という。

ショートステイのリーダーであった村田は，当時16名いた利用者を一カ所に集めた。「当時職員は４～５人いた。その日にショートステイの利用を開始した（利用者の）方もいた。職員全員で各部屋に行き扉を開けて回ったが，扉はすぐ閉まってしまった。さらに利用者に布団を被せた。外は雪が降っていたが，非常口は開けたままにしておかないといけなかった。地震の揺れで利用者は不安で一杯一杯で，職員も不安だった。少しでも明るい窓側へと移動し，皆かたまっていた。寒さに耐えるため，毛布やタオルケットを利用者に配った。釜石市の情報が入ってこなかったので，家族の安否が分からなかったので不安であった。６人家族で両親と兄は山道を通って三陸園に来た。祖父母は行方不明であった。何よりも一人でいることが怖かった。」

デイサービス担当の中野は，被災当日はいつも通りにゆーらっぷで勤務していた。「地震の時は23名の利用者がいて，送迎の準備をしていた。おやつの時間で，利用者は同じ部屋で全員がかたまっていた。揺れの間は利用者を落ち着かせるために『大丈夫だよ』と声掛けして，利用者のそばで地震がおさまるのを待った。窓の外を見て，海に家が浮いていて頭が真っ白になった。パニックになった利用者はいなかったが，不安にさせないよう努めた。備品庫に発電機があった。石油ストーブが使用できた。夜には一般の避難者が集まってきたので，食堂とデイホールを開放した。利用者は和室で寝具がある静養室で過ごした。当時職員は８名いた。家族のことを考える余裕はなかった。利用者に必要なサービスと安全を第一にという気持ちが先行した。」

赤浜地区は火災が発生していた。そのため，最初は造船所の人が避難して来た。その後に暗くなってから赤浜にある東大研究所の学生や地元の人々が避難して来て，避難者が全員で50～60名ほど三陸園に来た。利用者からラジオを借り，事務所前で夜通し情報を流し続けた。

営繕担当でデイサービスの送迎も担当していた野口は，地元の消防団員である。「地震が起きたのは，デイサービスの送迎前で，海の近くの石材店で作業をしていた。すぐに水門を閉めるために海に向かい，５分程度で最初の水門を閉め，次の水門で三陸園から下りてきたらふたぁヒルズの施設長に会った。らふたぁヒルズに向かう途中で国道へ行き避難誘導を呼び掛けた。しかし当日は私服で消防団の制服を着ていなかったためか，みんな車を運転していてなかなか聞いてくれなかった。

らふたぁヒルズへ移動し，３階に上がって水道を閉めたりしていた。理事長がらふたぁヒルズに到着し，『三陸園には男はいるのか』といわれ，裏山の道を回って三陸園へ戻った。ラジオで津波情報を聞いていて，以前から来るといわれていた大津波がついに来たと思った。移動途中で防波堤を超えて波が来るのが見えた。ラジオでは津波は10メートル程度といっていた。三陸園から第１波から第５波の津波を見た。三陸園は孤立したと思った。

三陸園ではまず防災備品庫を開けて，必要なものを取り出し準備をした。避難者の人数や米の量など状況を確認した。すでに漁業関係者や造船所の人，全員が男性で30名弱が避難して来ていた。水は６ｔくらい貯水槽にあった。火もプロパンガスがあったので心配はなかった。避難してきた男性たちと一緒に，実際には使用しなかったがトイレを２つ掘るなどした。

赤浜地区の火災によって東京大学の学生を含めて避難者が数名来た。一般避難者は20名ほどであった。赤浜地区に車で高齢者を中心に避難者を迎えに行った。約十数名を連れて来た。赤浜の火災はひどかった。

当時は不安よりはどう乗り越えるか，これから大変になるなという思いのほうが強かった。三陸園の利用者は津波を見ていないからか，あまりパニックを起こす人はいなかったようだ。」

事務職員の野村は，「当日の夕方に『寝たきりのおばあちゃんがひとり家にいるので助けてほしい』との連絡が入ったが，すぐに迎えには行かずに様子を

みることになったが，夜８時頃に再び助けに来てほしいと言われ，暗かったが男性職員２人で向かった。この方の所には普段は社協のホームヘルパーが入っていた。息子はいるが船乗りで，３カ月に１回程度しか家に戻らない方。そのためその後，１カ月ほど三陸園で預かることになった。」と当日の様子を述べている。

夜になり，野村は事務所にあったお菓子やチョコレートなどをかき集めて，避難者に配った。利用者にはおにぎりを提供した。利用者への対応はケアスタッフが担当した。また園長は直接，利用者の方々に現状を話した。地震や津波が分かっている方もいたが，まったく分からない方もいた。

営繕担当の野口は，「夜８時頃に状況確認のため海辺を歩いて三陸園からふたぁヒルズのほうへ向かった。今思うと危なかったのかなとも思う。三陸園よりはらふたぁヒルズの状況のほうがひどかった。避難者やけが人の治療などでらふたぁヒルズはごった返していた。その後，真っ暗な中で吉里吉里の家にいったん帰った。家族も家も無事だった。消防団員ということもあり，いざというときは家に帰れないということは，家族も理解していた。大槌は火事で真赤だった。夜中12時くらいまでには三陸園に戻り，30分くらいの仮眠をとった。ここからは体力勝負になることが分かっていたので，職員みんなにも寝たほうがいいと声をかけた。情報を得られるものはラジオしかなかったため，ラジオから被害状況を確認してみんなに伝えた。ラジオからは世の中の状況は分かったが近隣の情報が取れなかった。

らふたぁヒルズの施設長が消防団員として吉里吉里小学校の対策本部にいたので，無線機で情報を得て，三陸園に伝えた。子どものいる職員が泣き出し，その対応に苦慮した。職員は皆同じように不安だったと思う。自分の中ではできることは全てやったつもり。設備の確認や，周辺の状況確認など自分がいないと分からなかったと思う。」と述べている。

吉里吉里小学校のPTA副会長をしていたあるらふたぁヒルズのケアマネジャーは，次のように当日の様子を述べている。「釜石市でケアマネジャーの研修があり，11人ぐらいの法人職員と一緒にいた。地震後すぐに研修を中止させ，全員施設に戻るよう指示した。車でラジオを聴きながら吉里吉里に戻った。小学生の子どもが帰宅しているか心配になり，一度自宅に戻った。鍵が閉まっていたため家族が避難したことが分かった。少し安心した。

波が迫ってきたので，保育園に逃げ，その後家は流された。小学校に向かい，その後校庭から高台へ避難した。児童の様子は，泣いている子もいたが，教員の指示に従って動けていた。その場に親がいたらパニックになっていただろう。吉里吉里小学校では迎えに来た親に子どもを返さず，一緒に避難した。17時ごろ学校に戻り，親が迎えに来た児童は親元へ返した。児童全員が親元に戻るのに３日かかった。

役場が流されたという情報が入り，当日の夜に自主防災組織を作った。独自の動きをしなきゃいけないと思った。このまま高齢者や児童が同じところにいるのは無理だと思い，子どもは親と共に保育園に移した。」

（２）　２日目から４日目まで

事務職の野村によると，「米の備蓄を栄養士に確認すると，３日くらいしか持ちそうにないとのことだった。ガスが使用できたので，調理はすることができた。始めはおにぎりを作って渡したが，それではお米が足りなくなってしまうので，お粥にした。食器を洗う水がないため食器はラップをして使った。利用者も避難者も１日２食で対応。利用者は普段から，おやつを常備していたので，それを食事の間に少しずつ食べた。朝食は９～10時くらい，夕食は４時頃にした。食事は普段と違ったが特に体調を崩す利用者もいなかった。」という。

理事長が米と魚を運んできてくれた。魚を運んでいた冷凍車が被災して動け

なくなり，食べられるうちにということで，ホタテ・サバ・めかぶが三陸園に届けられた。

また避難者から聞き取りをして名簿を作成し，公開した。安否確認のために家族・親族・知人を探す人が訪れるようになった。ラジオは一晩中つけており，避難者が事務所のカウンターの中に入ってきてラジオから流れる名前を聞いていた。

２日目になってやっと研修に行っていた職員と連絡がとれた。（職員たちは）地震が起きてすぐに市民会館を出て間一髪で津波から逃げ，堤保育園に泊まっていた。２日目には三陸園に戻ってきた。しかし連絡が取れていない職員がいた。地震発生時に休暇となっていた職員４名は亡くなった。

レクリエーションワーカーの安村は，「２日目の午後にはらふたぁヒルズに避難していた利用者のうち，三陸園に戻りたいという方が出てきた。利用者の精神的な安定が第一と考え，利用者と一緒に三陸園に戻った。その後は三陸園で事務所勤務をした。家は助かったが，義母だけが心配だった。後に義母は助かっていることが分かった。三陸園に10日ぐらい泊まって仕事をしたが，その間，釜石の夫や大槌町役場に勤務する息子の安否については念頭になかった。大槌町役場の事は耳に入らなかった。

２日目のらふたぁヒルズは酷かった。亡くなった方や救助を必要とする方が多くおり，看護師さんだけでは人手が足りないので，初めての経験だったが遺体の処理を２名分手伝った。らふたぁヒルズでも三陸園でも，家族が避難しているかと訪ねてくる人が多く，皆熱くなり，ピリピリしている人も多かった。避難者名簿の情報が錯綜しており，情報が正しくないこともあり，何度も訪ねて来る人がいた。」と述べている。

堤保育園に避難していたヘルパー責任者の高橋は，２日目の午前中にらふたぁヒルズの施設長と一緒に軽トラックに乗って，らふたぁヒルズ経由で看護

師と一緒に三陸園に戻った。

三陸園近くの製材所の前で木が３～４本倒れていた。三陸園では事務所待機となった。ヘルパーステーションは物が散乱していた。高橋は,「震災当時私用の携帯電話を持っておらず, ヘルパー用の携帯電話で夫に連絡をしていたが, それも繋がらなくなった。３月13日に夫と再会するが，その後に体調が悪くなり，釜石の病院へと向かい，薬で安静にしていた。妊娠中とはいえ，動かないわけにはいかなかった。仕方のないことであった。家は流されて無くなり，夫の父親と義妹が亡くなった。宮古の病院で出産し，2012年４月から勤務に復帰した。鵜住居の仮設住宅から通っている。」と，自分自身の経緯を述べている。

相談員の富久は，余震が起こることを想定して夜勤職員は２人以上の配置とした。富久は,「被災２日目に自宅から歩いてやって来た職員の方もいた。職員としての責任感の強さを感じた。自分自身も，もし職場を放棄したら後で後悔するという考えがあった。」と述べている。数日経過してから，らふたぁヒルズに富久の息子が無事だと連絡が来た。

らふたぁヒルズに，浪板観光ホテルに観劇に行っていた利用者と一緒に避難していた栄養士の佐藤は，２日目の朝はらふたぁヒルズの栄養士と共に朝食作りをした。チルドしてあった作り置きの物があり，それを朝食として利用者と避難してきた方に提供した。その後，午前中に三陸園へ車で戻った。

佐藤は,「三陸園の食糧は，リスト化していたので５日分程度厨房にあることが分かっていた。外部委託の給食会社の調理員が４～５人いた。冷蔵庫の中の物もある程度使用でき，食中毒などもなく，夏でなくてよかった。」と述べている。

「食事は一日２食の提供に切り替えた。そのため通常の食事の半分弱程度の栄養価になった。一般の避難者は20人弱いた。それらの方々は長くは滞在していなかったが，三陸園にいる間は利用者と同じものを提供した。電気は使えなかったが，プロパンガスが使用可能だったため，最初はおかゆを提供した。だ

んだんとプロパンガスでご飯を炊くようになった。水は貯水槽から飲み水を，洗浄水やその他は沢水を使った。

嚥下障害のある利用者には，刻みやペーストなどの対応が十分にできなかった。10日間くらいはミキサーが使えなかった。経管栄養の利用者は２人いた。震災のショックで食事できなくなる利用者はなかった。」という。

デイサービス担当の中野は，「被災から２・３日目から消防団員であるらふたぁヒルズの施設長から町の情報が入り始めた。病院の情報も入ってきた。職員は夕礼で情報を共有した。当時はトイレが最も大変だった。便器にパッドを敷いて水分を吸収する等の工夫をした。水がないことと，そのために臭いがひどかった。

食事は一日２食を提供した。おかゆとおかず２品程度。一般の避難者にも提供した。認知症の利用者が，いつもより少ない食事のため『おなかがすいた』と繰り返し訴えたが，提供できず，そのたびに説明した。デイサービスを利用している高齢者の家族が迎えに来ることはなかった。」という。

在宅介護員の小田切は，「２日目にはらふたぁヒルズに行き，看護師さんのお手伝い，避難者の傷の手当て，利用者の見守りをした。３日目までは保育園でのお手伝いをした。」と語っている。

相談員の久山は，「２日目から，らふたぁヒルズにいた三陸園の利用者を２人ずつ三陸園に移動した。三陸園では職員が足りていたため，らふたぁヒルズの相談員の指示で，自分はらふたぁヒルズに残って利用者や避難者の支援をした。お寺に避難していて認知症が進んでしまった人を連れて来たりもした。らふたぁヒルズの中にいるけが人を，看護師が運ぶ優先（順位）を決めてヘリコプターに乗せ吉里吉里中学校まで移動させた。避難者名簿の作成を行い，移動した人なども記入した。一日に１回は三陸園に戻った。」という。

看護師の小野は，３日間はらふたぁヒルズに留まって，手伝いに来た医師とともに一般避難者の手当てをしていた。小野は，「頭を打った人や骨折した人，透析が必要な人，糖尿の人はヘリコプターで搬送した。らふたぁヒルズで亡くなった方は４～５人いた。

釜石からの移動中に自分の姉と父が避難したとのメールが届いていたため，２人の安否は分かっていた。夫が３日目にらふたぁヒルズに来たため会うことが出来た。ただ子どもたちの顔を見るまではとても不安だったが，看護師だからここを離れられないという気持ちだった。たまになんでここにいるのだろうと思うこともあった。

３日目から物資が届きはじめたことで，いろんなものを食べることが出来た。利用者さんも普段全部食べられない人も一日２食だったからか完食する人が多かった。」と述べている。

吉里吉里では消防団員をはじめ地域の人々が，被災の翌日から，幹線道路のがれき撤去や行方不明者の捜索をしていた。そのため，被災の３日目に自衛隊が入った時には幹線道の通行は可能な状態になっていた。またヘリコプターによる急病人の搬送は３日目から行われた。

らふたぁヒルズの施設長が消防団員だったため，日中に各施設に戻ってくる暇がなかった。そのため，夜になってから打ち合わせをしたため三陸園やらふたぁヒルズの職員は休めなかった。しかし吉里吉里地区の情報はらふたぁヒルズの施設長との毎晩の打ち合わせの時に得ることができた。

営繕担当の野口はデイサービスの送迎も担当していた。野口は「まず道路を作ろうとした。三陸園は高台にあり，地震や津波により道路が寸断され孤立してしまった。避難してきていた漁師など男手を借りて道路整備を始めた。重機やチェーンソーがあることを知っていたし，それらを扱える人がいたため２時間ほどで道路を通すことができた。

その後は，消防団員として日中は情報収集や救助活動をしに町へ向かい，夜は三陸園に戻り作業をするということを何日か繰り返した。２日目には沢水があることが判明し，職員が交代でポリタンクに汲みに行った。沢水はトイレや食器洗いなどに使用した。三陸園で使っていたお祭り用の電球などを発電機につないで明るくするなど，大変な中でもアイディアが生まれ，知恵が働き，出来ることが増えていくことを実感していた。3日目以降に泥棒の噂が耳に入り，三陸園に寝泊まりするようにした。

この頃から物資が来るようになり，食べ物は十分食べられているという感じだった。寒さ対策としては，ストーブを２台つけ，人を密集させることで暖を取った。」と話す。

当時三陸園ではターミナル期の利用者が２人いた。そのうち一人の女性は震災の数日前より健康状態が悪化し，久山相談員は家族に連絡を取り続けていたが，自宅の電話･家族の携帯電話も繋がらない状況で３月11日の震災を迎えた。震災当日に，その方の長男夫婦が，らふたぁヒルズに避難していたとの情報をもとに，らふたぁヒルズを出てからの移動ルートを確認しながら辿り，吉里吉里小学校の避難所に滞在されていることが分かった。この家族に連絡が付いたのは震災から３日目であった。吉里吉里小学校に避難していた家族を久山相談員が迎えに行き，利用者の状況を説明したところ，長男夫婦は三陸園で利用者に付き添うこととなった。その日から長男夫婦は終末の日まで付き添ったことで，利用者は３月18日の夜中に家族に看取られながら逝くことが出来た。この時には中学校の体育館が遺体安置所になっており，葬儀屋が来ているとの情報があったので，翌日，息子夫婦と一緒に体育館までご遺体を送って行った。

もうひとりの男性はしばらく経って，３月24日に亡くなった。この利用者のご家族は釜石市在住であった。久山相談員はご家族の居場所が分かるまで，市職員が作成した避難者名簿データや地域の口コミ情報などを頼りに探したが，

連絡が付くまでに３日ほどかかってしまった。久山相談員は釜石市と無線で連絡をとったり，同市に足を運ぶ都度，この利用者のご家族のわずかな情報の収集に努力した。しかしこの利用者の家族は最期を看取ることはできなかった。その理由としては，利用者の妻が突然亡くなられたことで，家族が利用者の妻の葬儀などで忙しかったためであった。ご家族が三陸園に来たのは３月25日であった。この利用者のご家族が「きっと，おばあさんがおじいさんを連れて行ったんだね」といっていた言葉が，久山相談員には印象的であった。

３月13日からは家に帰りたいと希望する職員を順に帰した。ガソリンが不足しているため，相乗りをして時間を決めて職員をそれぞれの家の近くまで送迎した。三陸園の職員は，まずらふたぁヒルズまで行って，それから帰宅した。出て行く職員が心配で，残った職員は帰ってきて欲しいと願っていた。外は街灯も何もないのですぐに暗くなってしまう。また泥棒の噂もあり，職員は一人では出かけず，必ず２人以上で相乗りするようにした。多くの職員が一時帰宅することで，家族の安否確認を行えたのである。しかし中には職場に戻るというと家族から責められている職員もいた。そのため仕事を休んだ職員もいる。小さな子どものいる職員も仕事を休んだ。震災の当日に職場にいて頑張った職員の中にも，家に帰らなければならない人もいた。結局，震災後に20数名の職員が退職した。

事務員の野村は４日目に一時帰宅した。「娘は堤保育園に預けていたので無事だと思っていた。後から主人が娘を迎えに行っていたことが分かり安心した。」と述べている。また野村は「物資は４～５日後に食料が届くようになった。国道から三陸園に続く道路は４月末になるまで通れなかったが，職員の家族などがいち早く食料やオムツ等を持ってきてくれた。４日目には対策本部がある吉里吉里小学校から理事長がお米を届けてくれたり，施設の倉庫にも大量には

なくても缶詰など備蓄していた。栄養士が残りの食材などを考えて献立を作ったこともあり，食料がなくなることはなかった。」という。

園長は，「ラジオを聞こうと，事務所に一般避難者が出入りすることが多くなり，知らない人が出たり入ったりするので，しばらくは眠れなかった。ショートステイやデイサービスの利用者に状況を説明したり話をして回った。励ましの言葉をかけた。後は野村さんと２人で正面玄関付近の廊下にイスを置き座っていた。」と述べている。

営繕担当の野口は，「２週間後に自衛隊のお風呂が設置されるまでは，タオルで身体を拭くなどしていた。歯ブラシやドライシャンプーなども無かったので，自分たちで調達しようと盛岡まで車を出し買いに行った。５日目くらいに薬や電池，ガスコンロ，絆創膏，下着，ひげ剃りなど必要だと思われるものを探して，スーパーやホームセンターを回ったが，どこも売り切れていてなかなか調達することができなかった。１週間から10日間くらいたつとこのような物資も届き始めるが，それまでに３～４回盛岡まで足を運んだ。また地域の方々が個人で持ってきてくれる物資もあったため助かった。物資は来はじめると，どんどん大量に届くが，それまでしのぐのが大変だった。盛岡に初めて行った時，持っていた携帯電話の電波が入ることが分かり，次に行った時には職員の携帯電話を一緒に持って行き，メールなどを受信して帰ってきた。安否の確認などの連絡を見ることができた。」という。

吉里吉里地区は山道を通ると盛岡まで約２時間である。ガソリンが不足している状況ではあったが，軽油が利用できる軽トラックなどを利用して盛岡に買い出しに出ていた。このようなことが可能であったことで，被災者の生活は徐々に改善されていった。もちろん盛岡市内でも物資は不足していたが，被災地から来たというとどこでも親切にしてくれたという。

理事長宅から三陸園に石油ストーブが届けられたが，燃料の灯油が入手できなかったために十分に使うことができなかった。しかし相談員の富久は，「ストーブが来たのは助かった。特に１階にいた状態の悪い利用者に対しては寒かったのでビニールハウスのビニールで周囲を囲って暖を取った。体調を崩した利用者もいた。２階の利用者の中には，下痢や発熱をした方もいた。ターミナル期の利用者もいたが，点滴もない状態であった。認知症の人は状態を把握できないので大変だった。

自宅で独居だった方で，認知症で大声をあげる方が入所してきた。その方が奇声を上げると，他の２名の利用者が順に騒ぐという状態となった。そこでこの３人を同室とした。この方のように避難所で過ごせない高齢者が入所してきた。デイサービスの利用者で帰宅できない方はショートステイに切り替えて三陸園で過ごしていた。」と語った。

（３）　１週間程度の期間

園長は，「デイサービスやショートステイで三陸園に来ていた利用者を家族のもとへ返そうと，相談員が避難所を回った。また一般の避難者は１週間くらいいたが，その後は各自それぞれの所に戻って行った。」と述べている。

野村は事務職としての大変さを次のように述べた。「町の金融機関がすべて停止していたので，隣町の釜石市の銀行まで頻繁に出かけて行った。介護保険の支払いもストップし，５月までは収入がなかった。利用者の家族も自宅を流された方が沢山いて，お手紙を出すこともできない状況でした。被災者に対する特例などもあり２カ月後の介護保険等の算定をする時は今まで経験したことがないくらい大変さを感じました。電気が使えないので，パソコンも使えず，夜間，発電機を使用していたらふたぁヒルズまで行き，避難者名簿や，救急搬送された方の状況などの資料を作る作業をしました。

三陸園では毎晩幹部が集まり，次の日の予定や現状の道路状況，利用者さん

の状態や相談などのミーティングをしていました。飲水以外の，洗濯やトイレには沢水を使用した。徒歩で片道５分くらいの砂利道を両手にポリタンクを持って沢水を汲みに行ったりもした。食事には，給水車の水を使った。」

久山相談員は１週間後にはらふたぁヒルズから三陸園に戻った。三陸園の看護婦も同時に戻った。三陸園に戻ってからも，職員の安否確認，利用者家族の安否確認に追われた。利用者家族を探すために，久山相談員は避難所を訪ね歩くことになった。当時は利用者の薬が不足し，三陸園の嘱託医を探しに行ったが，いなかった。処方してくれる医師を探すと，釜石のぞみ病院の先生に会う事ができ，薬の情報を渡して，翌日取りに行った。もらえたのは３日分。足りない薬は市内の薬局から手に入れた。医師のいるところには，何しろ何回も通った。ただ，使命感で動いていたという。

看護師の小野は，「14日に三陸園に戻ってきた。らふたぁヒルズに比べて外部からの避難者が少なかった。利用者の薬が足りなかった。15日にはなくなってしまう程度だった。普段は２週間分もらっていた。生活相談員と嘱託医を避難所に探しに行ったがいなかった。薬の情報を持って行き，処方してくれる医師を探した。18日に薬が届いた。それまでは一日３回の薬を２回に減らして工夫した。利用者さんは薬がいつもより少なかったせいか，寝られない方もいた。点滴を受けている方もいた。居室が変わってしまったことで不安になってしまった人もいた。３月14日，18日，24日，４月１日に次々と亡くなっていった。てんかんの発作が出てきてしまった方がいて，遠野の病院まで連れて行った。４日目に大槌まで車に乗せてもらって家族に会いに行った。家は流されてしまった。」と語った。

ヘルパー提供責任者の高橋は，「新聞記者の人が来て，個人情報を見ていく等の様々な噂が飛び交った。利用者や役場関係者，利用者の家族への対応などで３月～４月くらいまでは忙しかった。色々な人の支援が来た。」と述べてい

る。

相談員の富久は２階の利用者の中には４月くらいから体調が悪くなる人もいた，と述べている。高齢者の中には，ある程度落ち着いてきてから体調を崩し始めた方がいたということである。

ショートステイのリーダー・佐々木は，「被災から10日ぐらい経過してから気が進まない中，家に帰れたが，何もできなかった。」と述べている。

デイサービス担当の中野は，「１週間後頃からは，外部からの支援物資が届きはじめる。葬儀屋からろうそく，利用者の家族から食糧が届いた。自衛隊の物資で自分が欲しいものを選べた時が有難かった。しかしトラブルもあった。一般の避難者が他からおにぎりを提供されたことを施設にかくして，施設の食事も食べていたことがあった。利用者のことを考えるととても悲しかった。

避難所で当日利用でなかった利用者とその家族を探した。ガソリンが無かったため，利用者を家族のもとに帰すこともできなかった。この頃から確実な情報が入りはじめた。また家に帰る時間がもらえた。入浴もできた。」と述べている。

ケアマネージャーの小田切は，「１週間後くらいから三陸園での利用者の名簿作りを始めた。居宅の利用者のデータはなかったので職員３人の記憶を頼りにして，地域ごとにまとめた。作った名簿は役場の地域包括（支援）センターに回した。

ショートステイやデイサービスの利用者の薬の確認をした。不安な中で利用者の話し相手をしていた。」という。

営繕担当の野口は，「一般避難者には少しずつ大きい避難所へ移っていくようにお願いした。家族の安否を確認するために帰りたい職員がたくさんいたため，１台の車で順番に帰るようにした。デイサービスの利用者も車に乗せ，相談員と一緒に避難所を回り，家族のもとへ戻せる人は帰すようにした。家族の

もとに帰せない利用者は再び三陸園に連れ帰った。ガソリンが無かったので，他の車からガソリンを抜き，低燃費の車に移すなどして節約していた。吉里吉里地区にあったガソリンスタンドや被災したタンクローリーからガソリンの支給があったが，一般車はもらえず，緊急車両などに限られていた。ガソリンの復旧には２週間以上かかった。

８日くらいたつと電波が入るようになるが，（携帯の）充電器が無くて使えなかった。そこで，NTT（ドコモ）盛岡に電話をかけ，充電器を大量に確保してもらい調達した。今思うと，盛岡に出られたことは大きかったと思う。発電機も備えておいてよかった。発電機一つで調理や明かりに使用でき，パソコンも使うことができた。３週間後には発電機を購入した。エレベーターも動くようになり，入浴もできるようになった。職員が最初に入浴をし，その後に利用者を入浴させた。」と述べている。

３月21日に花巻市の社会福祉法人大谷会が灯油を持ってきてくれる。寒さをしのぐのに理事長が持ってきてくれたストーブを使用していたので助かった。介護の支援も数名が一週間交代で１カ月くらい来てくれた。職員は休みなく働いていたので，介護のボランティアは助かった。４月に入り電気が復旧し，５月の連休あけに水道が復旧した。

（4）　１カ月後

デイサービスの中野によると，「３月27日には利用者全員の居場所や安否の確認を終了した。そして４月５日にデイサービスを再開した。施設側から『必要なサービスはなにか？』というのを聞いたところ，入浴をさせてほしいというニーズが挙がった。そこで温泉や自衛隊からの水を利用し，週１回の入浴を始めた。５月からは通常に戻ったが，利用者は15名程度で大槌の人のみという条件で行った。デイサービス担当の職員は３名が退職した。２名は大槌町から

引っ越し，１名はパート職員として復帰した。」という。

レクワーカーの安村は，「４月１日ぐらいから，利用者が何人か集まり，踊り場等で話をするようになった。」と述べている。「何かレクをしたいと思ったが，ラジオは震災の話が主で，音楽などは流れていなかった。乾電池で動くラジカセ等があれば良かったのではないかと考えた。しかし，実際にそのようなものがあっても，利用者のレクリエーションのためという理由で，今回のような災害時に乾電池を使えたかは微妙だと思う。５月～７月ぐらいには歌や劇を見せに来てくれた人たちもいた。利用者も職員も喜んでいた。」と話してくれた。

看護師の小野は，「３月21日から看護師のボランティアが入ってきた。２人の人が交代で継続して入ってくれたので助かった。その２人がチーフクラスの人だったこともあり，利用者の既往歴を見れば利用者の現在の状態を分かってくれた。薬は以前とすこし変わったので施設の看護師も一緒に覚えていった。体も心も休めたい時期だったのでとてもありがたかった。４月18日に利用者さんの一人が大阪の特養に移ることになったため，その方に付き添って大阪に行った。その時に震災以来初めて施設を離れた。被災地以外の世界を見て『これが普通なのだ。』と改めて思うことができてほっとした。

４月20日までガソリンが足りなかったため，三陸園に寝泊まりした。休みの日は父と息子のいる避難所に泊まりに行った。５月になってやっとほっとした。」という。

栄養士の佐藤は，「３月中は，献立は自身で考えやりくりした。先の見通しが立たないため今ある食材を確認しつつ３日分ずつ献立を考えた。以前に栄養士会の発表で，味噌汁に『黄粉』を混ぜると栄養価が上がると聞いた事を思い

出し，在庫にあった黄粉を活用した。４月５日にデイサービスが再開した。その頃からおかずを１品少なくし，一日３食に戻した。通常に運営できるありがたさを感じた。一日の食事回数が３食に戻り，だんだんと元に戻ってくるのがうれしかった。４月15日にはおかずも元に戻った。５月に入って，業務中座れる時間ができるようになった。６月初めにイベント食として，お赤飯を葉に包んでお弁当箱に入れた郷土料理を出した。」とのことであった。

ケアマネジャー小田切は，「１カ月くらい経った頃に，避難所である吉里吉里小学校に居宅支援相談所を作った。そこでは避難所に来る人への対応を行い，必要であれば施設へつなぐことをした。この時，安否の確認はできていたが，１人の職員は退職された。居宅サービスの利用者名簿にある方々の安否確認を４月初めから徒歩で行った。利用者の安否確認だけではなく，いろいろな情報を収集しながら毎日歩いた。４月末までに名簿の人は確認できた。居宅利用者100人中死亡者は４～５人程度だった。４月末からは家族ケア，今後のニーズの確認，薬の手配などを行った。

震災から１カ月後に大阪から保健師のボランティアが来た。その方々が在宅で困っている人のところへ行ったり，施設へつなげたりしてくれた。お風呂に入れるようになった時，一人では入れなかった人がらふたぁヒルズで入浴できるようにしたり，NPO まごころネットのボランティアが入浴を手伝ったりしてくれた。

３月20日に携帯がつながり，親せきや友人と連絡がとれるようになった。自分に家族はいないので，家族の安否はあまり心配ではなかった。ただ自宅の１階部分が浸水していたため，ボランティアに泥を撤去してもらったりしている間は，３カ月間三陸園に泊まっていた。この時も午前は事務所で相談受付，午後は安否確認をしていた。」と語った。

（5） 当時の気持ち

レクワーカーの安村は当時を振り返って以下のように述べている。「何かできることはやろうという思いがあった。また自分一人ではないという思いが強かった。人ってこんなに優しいんだと思ったことも度々あった。当時は車の乗り合いが普通になっていた。心のケアネットの人達が来てくれたのも良かった。風呂に入らなくても，歯磨きしなくても生きていけると思った。

直接被災していない職員のほうが心の傷が深いこともあった。家が残っているか，流されたかではなく，どんな様子を見たかが大きかった。」

デイサービスの中野は，次のように語った。「当日など職員は精一杯やることができたと思っている。目の前にいる利用者に必要なサービスを提供したいという気持ちから頑張れた。

地震の発生が送迎に出る前でよかった。送迎中だったら被害は拡大していた。また，当日の利用者の中には沿岸部に住む利用者もいたので，施設にいたから助かったという方がたくさんいた。そこはとても恵まれていたので感謝したい。しかし，逆に利用日でなかったため津波から逃げられず犠牲になった人もいた。

普段は火災用の訓練しかやっていなかった。大槌町から津波の対策についての説明もあったが，『どうせ来ないだろう』という気持ちがどこかにあったので真剣に聞けていなかった。津波用のマニュアルは用意されてなかった。

職員は当日から家族に会えることはなく，不安で眠れなかったが，声掛けをしながら，助け合った。被害にあった職員には物資を家から持ってきたりして，『共に頑張ろう』という気持ちだった。

利用者は一時的に状態が落ちてしまう方もいたが，デイが再開し，状態が安定し回復してきた。スタッフは話を聞いてあげることで心のケアに努めた。」

相談員の久山は，「日赤の医療団から薬をもらったりした。３月21日から同法人（日赤）から派遣のボランティアが来た。職員と密接に連携を取り，ミーティングをしたのでボランティアとのトラブルはなかった。４月からは県の社協からもボランティアが来た。10月まではいつもボランティアがいた。ボランティアの支援がなければ職員の休みはなかったと思う。多くの職員が辞めてしまった。特に退職者は中堅リーダーが多かった。そのリーダーの抜けた穴は大きく，ボランティア介護職員の協力でつなぐことができた。本当に感謝です。

ターミナル期の利用者がいたので釜石市との無線連絡を取ったりして，直ぐに市町村をかけずりまわり家族を捜した。三陸園では家族が亡くなられた情報を利用者には伝えていない。」と述べている。

相談員の富久は，以下のように語った。「今回のことは心の中で一生残ると思う。今考えても冷静になれない。忘れることはできない。利用者からは叩かれたり，暴言をあびせられたりもした。最初の頃は沢水を汲む毎日で，その水で洗濯の日々であった。かなりの重労働であり，沢水は冷たかったが気にならなかった。避難所のことを考えると三陸園は恵まれていたと思う。

また２～３日は食べなくてもどうにかなると分かった。疲労とストレスの蓄積で，先の見えない辛さがあった。そのような時に，大谷会の方がボランティア支援として来てくれたことは感謝しており，助けられた思いであった。介護のことが分かっている人々が手伝ってくれた。老人を抱えて入浴してくれた。もし大谷会の介護職の方が来てくれなかったら，職員は皆倒れていたかもしれない。

いろいろなボランティアが来たが，浜の人はきついと思った。内陸の方は温厚な方が多かった。施設から派遣された職員の中には，嫌々来た方もいて，『来たくなかったのよ』といわれたことで，気を使ってしまった。このようにいわれたことが悲しいことだと思った。自分たちが甘えすぎていたのか，自分たち

でボランティアに頼らずにやったほうがよかったのか，などと思ってしまった。何気ない一言に注意するようになった。新しい職員が来ても一から教えなければならない大変さが続いている。」

ショートステイのリーダーの村田は，「いつまで続くか分からない不安があった。先が見えない，体力が持たない不安である。退職する職員が出るたびに，職員がいなくなったら最後はどうなるのだろうと考えた。消防団の活動をして，施設にも来て働いてくれた方もいた。この状況を乗り越えられたのは，がんばっている職員，職員同士のことを思いやることができる職員がいたからである。一緒に過ごした職員は忘れることはできない。弱音をはかず，皆とても強かった。」という。

栄養士の佐藤は，以下のように述べている。「菓子パンなどが多く届き，賞味期限内に食べきれないこともあった。やむを得ず期限切れを食べさせることになってしまった。嚥下障害のある利用者には，パンをパン粥にした。高カロリーゼリーなども届き，おかず代わりに提供した。物資の中には，高齢者向けでないお菓子や炭酸飲料などもあった。数が人数分なく，公平に分けられないものがあり困った。また支援物資は，次にいつ来るかが分からず，今提供していいか，とっておくべきかの判断が難しかった。自衛隊からは注文書があり，足りないものをリストアップすると届けてくれた。普段提携している医療食業者が比較的早いうちに来てくれて，とろみ剤等が手に入った。

またプロパンガスのみで調理したため，どうしても煮物が多くなってしまった。調理方法を工夫したら良かったと今は思う。初期は一般の避難者の数が正確に把握できず，提供時に数が合わなくなることがあった。また停電のために保温機能が使用できず，冷めた食事になってしまった。

普段の水分量より少なかったこともあり，嚥下トラブルがおきたということ

はなかったが，全体的に脱水の症状が見られた。14日後の体重測定では，体重が減少している利用者が多かった。４月まで利用者の食事摂取状況を直接見ることはあまりなかった。ターミナルに入った方に細かい対応ができたら良かったと思う。

出勤可能な職員が来てから交代で休憩がとれた。３月16日に一人暮らしのアパートを見に行った。アパートの無事は聞いていた。１週間後に３日間の休みをもらい，陸前高田の実家を見に行った。家は流されていたが，避難所で家族の無事を確認できた。２日間だけ休んで施設に戻った。ここで初めて家族の安否が確認できたが，それまでは利用者にご飯を出さなければと，家のことも考えられなかった。

上司は実家が陸前高田であることを考慮して長く休みをくれた。家族の無事を報告すると，同僚が『よかったね』と喜んでくれた。３月中は施設で生活した。４月からアパートに戻った。余震が続き恐怖も感じ，家族の近くにいたい気持ちもあったが，自分の代わりもいないので辞めようとは思わなかった。短大の友人と会って内陸で食事をしたりすることでリフレッシュした。」

看護師の小野は，「物資は最初，食べ物が主であった。その他には女性だからこそ下着やその他の物がほしかった。１週間後ぐらいまでとても寒かった。人手が足りなかった。職員がもっといたら，体力的にも楽だったかもしれない。ただ，動いていないと駄目になる気がするという心境だった。止まると崩れちゃう気がした。目の前のことだけをやっていた。その中で，いろんな人の優しさを感じることが出来た。今後は利用者の薬を常に１カ月分もらうことなどが必要だと思った。

今回ボランティアに来てもらって，とても助かった。だからこそ，またどこかで災害が起きたら，ボランティアに行きたいと思えるようになった。今までは家族のこともあり，家庭から離れられないと思っていたけど，震災で家族が

バラバラに離れて暮らせることが分かった。」という。

営繕担当の野口は，次のように語った。「地震発生から30分の間で多くのことができたと思う。30分間が長く感じた。これまでの消防団や町内会での活動が今回役に立った。

４月８日にかなり大きな余震があった。そのため，自宅には１カ月経ってから戻ることができた。その頃から徐々に休めるようになった。家族の理解があったため自分のやるべきことに集中できたが，子どもたちは外で遊べないなどストレスや不安が溜まっているのではないかと心配だった。また，他の職員も家族が心配で家に帰りたいと希望するものが多かったが，初めの頃は職員が帰るわけにはいかず，その現状を理解してもらい我慢している者もいた。２日目に調理場の人で，子どもが腎臓病だからと泣いて帰るという人がいた。３日目に交代で帰れるようになってからは，一度帰った職員がもう戻って来ないのではないかと心配だった。しかしみんな家族の安否が分かれば戻って来てくれたのでほっとした。仕事に対する責任感があるのではないか。

ボランティアには足湯なども含めて助かった。ケアの支援はとても助かった。支援に関しては，様々なものがあり満足している。ただ，支援なれしてしまった面もある。支援を待つだけでなく自立することが大切。待っているだけだと，支援も遅くなりトラブルのもとになる。何か行動を起こせば，そこに支援も集まってくる。一番辛かったのは３～４日目だった。」

事務職の野村は，「４月に入り電気が復旧し，５月の連休あけに水道が復旧した。当時は施設に泊まって働くことが当たり前だと思った。周りの職員も家を失ったりしながら働いていた。家を失ったのも自分だけじゃないという思いだった。家族は無事が確認できていたし，数日後には家族に会えると思い働いていた。」と述べた。

三陸園の園長は,「私は家族の心配もなかった。情報伝達の役割として事務所にいるだけでも必要だと思いながら三陸園に寝泊りしていた。デイサービスの利用者で，１年半経った今でも帰れない人もいる。仮設住宅は狭く，ベッドを置くスペースもない。暮らせる場所がなく，ショートステイとして何日も預かっている状態である。」ということを話してくれた。

居宅支援の小田切は,「デイサービスが再開したのは８月末であった。自分も自宅から三陸園に通いはじめた。しかし震災のことを聞くと，入所している利用者からはなぜ帰れないのか，家族のところ行きたいなどの声があった。

震災当時は利用者と家族のニーズの板挟みの中で何が最善か，利用者を一番に考え行動した。自分のことよりまずは利用者と考えた。困ってる人がいると思った。」という。

（6） 今後のことについて

デイサービスの中野は,「今は，送迎中に津波が起こったときにどこに向かうのかということを職員間で確認している。日頃から有事の時の確認をしている。また備品を準備しておくことが大切であると思う。特にガソリンや薬，食糧の準備は必要である。

今では仮設からデイサービスを利用している方もいる。利用者は増加している。仮設での生活でストレスを抱えてしまっている方がいて，そんな方こそサービスが必要であると考えている。そんな方に必要なサービスを提供したいという想いがある。それが今仕事をしている原動力になっている。

仕事の意義を考えると，真っ先に浮かぶのは困っている利用者とその家族の顔だ。今までデイサービス開始の希望を受けて断ったことがない。このデイサービスを選んで利用してくれている利用者のニーズを充足させることに，この仕事のやりがいを感じる。」という。

栄養士の佐藤は，「震災の反省として，2012年度からやわらかい食事の非常食を準備してもらった。利用者の食糧のストックは，２週間分は常にあるように発注を調整するようになった。以前は利用者の希望を後回しにしてしまうことがあったが，いつ何があるか分からないので，その都度希望をかなえられるよう心がけている。食事量の低下している利用者に対して，食べたいといわれたものをできるだけすぐに提供するなどに配慮するようになった。」と述べている。

営繕担当の野口は，「災害訓練をするなら実際に停電させるなど具体的に行うべきだと感じた。津波や地震が来ることを理解したうえで準備しなくてはいけない。とにかく逃げろということしかいえない。

ただ，どうしても風化してしまう気持ちがある。今でも地震はあるが津波警報が出るまで逃げようとは思えなくなってしまった。そして，地震直後はみんなで頑張ろうと一つだった気持ちが，いまではバラバラ。家がある人はない人に気を遣うし，支援慣れしてしまっている人も多い。

今も息抜きする場所がない。飲み屋などの娯楽が何もなく，それがストレスの原因になっているのではないか。復興というが，娯楽は後回しにされてしまう。しかし必要としている人はたくさんいる。」と語る。

事務職の野村は災害の当日から様々な記録をとっていたことについて，「記録をとっていたのは園長の考えで，後で役に立つと思った。職員の移動や，物資が届いたことなどを記録していた。発電機があればよかったと思う。電気と水はとにかく大事だということを実感した。」という。

相談員の富久とショートステイのリーダー村田は，「水が必要だった。飲める水の用意が必要であると実感した。また暖を取るためのものの用意は，利用

者だけではなく避難して来る一般の人にも必要であった。」と述べている。

介護支援専門員の小田切は，「避難所にはいっぱい物資があるのに在宅の人は取りに行けない状況であった。しばらくしてから在宅の家にも物資が行くようになった。吉里吉里の地域性がなければこのような支援はできなかった。」と述べている。

2012年９月時点で三陸園にいる吉里吉里出身者は，ショートステイの利用者及び被災特例者（自宅に帰宅できなくなった方）を含めて19名である。

注

（１） 岩手県社会福祉法人台帳　http://www.pref.iwate.jp/fukushi/houjinshidou/002386.html　検索日2014年７月27日

（２） 2013年２月24日（日）～３月２日（土）に東京・有楽町の交通会館で開催された写真展『リメンバー大槌』で展示されていた写真の説明および職員からのインタビューによる。